

## 臨床実地問題 50問(解答時間2時間)

1 前眼部の組織像を別図1に示す.

正しいのはどれか. 2つ選べ.

- a ①——虹彩色素上皮
- b ②——線維柱帯内皮網
- c ③——集合管
- d ④——強膜岬
- e ⑤——Müller筋

2 眼底の組織像を別図2に示す.

矢印の部位はどれか.

- a Bruch膜
- b Haller層
- c Sattler層
- d 網膜色素上皮
- e 脈絡毛細血管板

3 眼底写真と Humphrey 視野検査の結果の組合せを別図3に示す.

正しい組合せはどれか. 3つ選べ.

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

4 コンタクトレンズの写真を別図4に示す.

誤っているのはどれか.

- a 低含水率で酸素透過性が低い.
- b 300品目以上が認可されている.
- c 高度管理医療機器に分類される.
- d インターネットで購入可能である.
- e 医薬品副作用被害救済制度が適用される.

5 50歳の女性. 4年前から視力障害がある. 頸部と膝窩に黄白色丘疹があり, 遺伝子異常で起こる疾患と皮膚科で説明されている. 視覚障害が遺伝しないか心配になり来院した. 両眼の眼底写真を別図5に示す.

遺伝形式はどれか.

- a 常染色体優性遺伝
- b 常染色体劣性遺伝
- c X連鎖性優性遺伝
- d X連鎖性劣性遺伝
- e 母性遺伝

6 58歳の男性. 右眼の眼球突出を指摘されて来院した. 眼窩MRI画像と病理組織像を別図6A, 6Bに示す.

診断はどれか.

- a 腺癌
- b 多形腺腫
- c 腺様囊胞癌
- d 悪性リンパ腫
- e IgG4関連眼疾患

7 48歳の女性. 左眼の異物感と腫瘤に気付き来院した. 視力, 眼圧, 中間透光体および眼底に異常はない.

左眼前眼部写真を別図7に示す.

治療で正しいのはどれか.

- a 穿刺
- b 摘出
- c 放射線照射
- d 抗真菌薬投与
- e 副腎皮質ステロイド点眼

8 10歳の男児. 両眼の搔痒感と充血および眼脂を主訴に来院した. 涙液中総IgE検査は陽性. 左眼前眼部写真を別図8に示す.

適切な治療はどれか. 2つ選べ.

- a 抗菌薬点眼
- b 免疫抑制薬点眼
- c 抗アレルギー薬点眼
- d 副腎皮質ステロイド内服
- e 非ステロイド性抗炎症薬点眼

9 8歳の男児. 下眼瞼にできものができたため来院した. 視力は両眼ともに1.2(矯正不能). 外眼部写真と病理組織像を別図9A, 9Bに示す.

考えられるのはどれか.

- a 過誤腫
- b 血管腫
- c 粘粒腫
- d サルコイドーシス
- e スポロトリコシス

10 29 歳の女性。両眼の搔痒感と眼脂を自覚したため来院した。鼻汁もみられる。診断のために別図 10 に示す検査を行った。

この検査で正しいのはどれか。2つ選べ。

- |                           |                       |
|---------------------------|-----------------------|
| a 健康保険の適用ではない。            | b 好酸球が存在すると陽性になる。     |
| c 検査に要する時間は約 15 分である。     | d アレルギー性結膜炎の確定診断ができる。 |
| e 春季カタルにおける陽性率は約 90% である。 |                       |

11 生後 6 か月の乳児。出生時から左眼の角膜混濁があり、精査を希望して来院した。右眼に異常はみられない。催眠下で測定した左眼の眼圧は 10 mmHg。左眼前眼部写真と超音波生体顕微鏡(UBM)像を別図 11A, 11B に示す。

治療方針で適切なのはどれか。

- |           |                  |           |
|-----------|------------------|-----------|
| a 経過観察    | b 瞳孔形成術          | c 全層角膜移植術 |
| d 線維柱帶切開術 | e 角膜内皮移植術(DSAEK) |           |

12 18 歳の女子。コンタクトレンズ作製のために来院した。矯正視力は両眼ともに 1.2。右眼の角膜に異常所見を認める。右眼前眼部写真を別図 12 に示す。

診断はどれか。

- |                    |                             |               |
|--------------------|-----------------------------|---------------|
| a Fuchs 角膜内皮ジストロフィ | b 斑状角膜ジストロフィ                | c 格子状角膜ジストロフィ |
| d 顆粒状角膜ジストロフィ      | e Posterior corneal vesicle |               |

13 70 歳の男性。右眼の充血と眼痛を主訴に来院した。治療前と治療後の右眼前眼部写真を別図 13A, 13B に示す。

治療に用いた薬はどれか。

- |                         |                 |
|-------------------------|-----------------|
| a ピマリシン点眼               | b ゲンタマイシン硫酸塩点眼  |
| c セフメノキシム塩酸塩点眼          | d レボフロキサシン水和物点眼 |
| e ベタメタゾンリン酸塩エステルナトリウム点眼 |                 |

14 3 歳の男児。右眼の黒目にできものがあることに母親が気付き来院した。視力は右 0.2(0.6 × +0.50 D ⊖ cyl +3.00 D Ax 110°), 左 1.2(矯正不能)。眼底に異常はない。前眼部写真を別図 14 に示す。

まず行うべき治療はどれか。

- |               |                    |              |
|---------------|--------------------|--------------|
| a 表層角膜移植      | b 1 日 2 時間の左眼遮閉    | c 雲霧法による眼鏡処方 |
| d 腫瘍切除と病理組織検査 | e 調節麻痺下屈折検査による眼鏡処方 |              |

15 37 歳の女性。左眼眼痛と軽度の視力低下を訴えて来院した。前眼部写真と生体染色写真を別図 15A, 15B に示す。

診断はどれか。

- |                     |                    |            |
|---------------------|--------------------|------------|
| a ドライアイ             | b 再発性角膜びらん         | c ヘルペス性角膜炎 |
| d Meesmann 角膜ジストロフィ | e Thygeson 点状表層角膜炎 |            |

16 20 歳の男性。3 年ほど前から両眼とも見づらさを自覚していたが、3日前に突然の右眼の視力低下を自覚したため来院した。皮膚科でアトピー性皮膚炎の治療中である。視力は右 0.01(矯正不能), 左 0.7(1.0 × +2.00 D ⊖ cyl -4.50 D Ax 150°)。前眼部写真を別図 16 に示す。

正しい治療はどれか。

- |        |           |               |        |        |
|--------|-----------|---------------|--------|--------|
| a 経過観察 | b 抗菌薬類回点眼 | c アシクロビル眼軟膏点入 | d 羊膜移植 | e 角膜移植 |
|--------|-----------|---------------|--------|--------|

17 70 歳の男性。半年前から右眼の視力低下を自覚していたが症状が改善せず、運転時の羞明感も強くなったため来院した。右眼水晶体徹照写真を別図 17 に示す。

水晶体における混濁部位はどれか。

- |       |        |        |     |       |
|-------|--------|--------|-----|-------|
| a 前囊下 | b 浅層皮質 | c 深層皮質 | d 核 | e 後囊下 |
|-------|--------|--------|-----|-------|

**18** 72歳の女性。両眼の白内障に対して1か月前に手術を受けた。視力は右1.2( $1.5 \times -0.50\text{D}$ )、左1.0( $1.2 \times \text{cyl} - 0.50\text{D Ax } 85^\circ$ )。右眼前眼部写真を別図18に示す。

この患者の自覚症状で頻度が高いのはどれか。2つ選べ。

- a 羞明 b ハロー c 青視症 d 単眼複視 e 薄暮時のコントラスト低下

**19** 34歳の男性。幼少時から低視力で、これまで弱視と言われている。視力は両眼ともに0.1(矯正不能)。毛髪や皮膚の色調は正常。母方の親戚に同様の症状の男性が2人いることが分かっている。両眼の眼底写真を別図19に示す。

正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 眼振はない。 b 遮光眼鏡が有効である。 c ERGは陰性型である。  
d 黄斑の形態は正常である。 e 母親の眼底検査が診断に役立つ。

**20** 4つの異なる疾患のOCT像を別図20に示す。

OCTの所見と病名で正しい組合せはどれか。

- a A: 中心性漿液性脈絡網膜症 B: 硝子体黄斑牽引症候群 C: 加齢黄斑変性 D: 糖尿病黄斑浮腫  
b A: Vogt-小柳-原田病 B: 低眼圧黄斑症 C: 黄斑前膜 D: 加齢黄斑変性  
c A: Vogt-小柳-原田病 B: 中心性漿液性脈絡網膜症 C: 加齢黄斑変性 D: 網膜静脈分枝閉塞症  
d A: 加齢黄斑変性 B: 中心性漿液性脈絡網膜症 C: 網膜細動脈瘤 D: Behcet病  
e A: 中心性漿液性脈絡網膜症 B: Vogt-小柳-原田病 C: 黄斑前膜 D: 糖尿病黄斑浮腫

**21** 34歳の女性。10日前から急に左眼の視力が低下し、視野が欠けたことを自覚している。左眼で見ると少し眩しさもあるため来院した。視力は右0.2( $1.5 \times -6.00\text{D}$ )、左0.08( $0.6 \times -5.50\text{D}$ )。左眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真およびOCT像を別図21A, 21B, 21Cに示す。

正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 若、中年者の近視眼に多い。 b 抗VEGF薬の硝子体内注射が有効である。  
c 硝子体中に雪玉状の混濁がみられることが多い。 d 網膜周辺部の淡い白点は瘢痕を残して治癒する。  
e 視力低下や視野欠損は自然回復することが多い。

**22** 61歳の男性。50歳頃から両眼の視力低下と視野狭窄が進行している。視力は右0.03( $0.1 \times -3.00\text{D} \odot \text{cyl} - 1.00\text{D Ax } 30^\circ$ )、左0.04( $0.4 \times -2.25\text{D} \odot \text{cyl} - 2.00\text{D Ax } 130^\circ$ )。兄と祖父が視力不良である。両眼の眼底写真を別図22に示す。

正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 常染色体劣性遺伝を示す。 b ERGは末期まで保たれる。  
c 原因遺伝子はCHM遺伝子である。 d 血中オルニチンの上昇がみられる。  
e 保因者の眼底には色素の脱出と集積がみられる。

**23** 53歳の男性。右眼の増殖糖尿病網膜症に対して硝子体手術を施行し、術後早期に眼底所見が改善したにもかかわらず、視力は0.02(矯正不能)にとどまった。術前のフルオレセイン蛍光眼底造影写真を別図23に示す。

視力不良の原因で最も考えられるのはどれか。

- a 虚血性黄斑症 b 血管新生緑内障 c 虚血性視神経症  
d 牽引性網膜剥離 e 網膜中心動脈閉塞症

**24** 74歳の男性。左眼の変視症が出現したため来院した。視力は左1.0(矯正不能)。左眼眼底写真とOCT像を別図24に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 黄斑下出血 b 脉絡膜腫瘍 c 網膜色素上皮剥離  
d 黄斑円孔網膜剥離 e 中心性漿液性脈絡網膜症

25 42 歳の女性。2か月前から右眼で見ると下の方に影のような物が見えると訴えて来院した。視力は右 1.2(矯正不能)、左 1.5(矯正不能)。右眼眼底写真と広角で撮影したフルオレセイン蛍光眼底造影写真および超音波 B モード像を別図 25A, 25B, 25C に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 脈絡膜剥離      b 悪性黒色腫      c 脈絡膜血管腫      d 転移性脈絡膜腫瘍      e 網膜色素上皮肥大

26 3 歳の女児。瞳孔の異常を指摘され、母親に連れられて来院した。右眼前眼部写真を別図 26 に示す。

正しいのはどれか。

- a 視力はよい。      b 眼振を生じる。      c 緑内障を合併する。  
d 全身性疾患を合併する。      e 常染色体優性遺伝である。

27 11 か月の乳児。精神運動発達遅滞とけいれん発作があり小児科に入院中である。普段から母親と視線が合わないことがあり、精査目的で来院した。左眼眼底写真を別図 27 に示す。

考えられる疾患はどれか。

- a Hurler 症候群      b Tay-Sachs 病      c 先天トキソプラズマ症  
d 家族性滲出性硝子体網膜症      e 先天サイトメガロウイルス網膜炎

28 59 歳の女性。数日前からめまいと耳鳴があり、両眼の霧視と頭痛を主訴に来院した。左眼前眼部写真、眼底写真、フルオレセイン蛍光眼底造影写真およびインドシアニングリーン蛍光眼底造影写真を別図 28A, 28B, 28C, 28D に示す。異常所見はすべて両眼に同程度認められる。

この疾患で誤っているのはどれか。

- a モンゴロイドに多い。      b HLA-DR 4 陽性である。      c 肉芽腫性ぶどう膜炎である。  
d 視野検査で中心暗点を認める。      e 髄液検査が診断に有用である。

29 32 歳の男性。左眼の視力障害で来院した。生来、精神運動発達遅滞に加えて、てんかん発作があり、抗てんかん薬を内服中である。顔面頬部に皮脂腺腫が多発している。初診時に視力測定ができず、左眼は成熟白内障で眼底は透見できない。右眼眼底写真と OCT 像を別図 29 に示す。

考えられる全身疾患はどれか。

- a Bourneville-Pringle 病      b Louis-Bar 症候群      c Sturge-Weber 症候群  
d von Hippel-Lindau 病      e von Recklinghausen 病

30 62 歳の男性。3か月前から左眼に霧視があり、数日前から視力低下が増悪したため来院した。視力は右 1.0(矯正不能)、左 0.4(矯正不能)。眼圧は右 15 mmHg、左 12 mmHg。左眼眼底写真の後極と鼻側を別図 30 に示す。

異常値が疑われるるのはどれか。

- a クォンティフェロン検査      b 血清抗リカバリン抗体      c 血清抗トキソプラズマ抗体  
d 前房水ウイルス抗体率      e 硝子体液 IL-10/IL-6 比

31 18 歳の男子。両眼で見ると見づらいことに気付き来院した。前眼部と中間透光体および眼底に異常はない。

別図 31 に示す機器を用いて検査を行う場合、測定できないのはどれか。

- a 融像幅      b 不同視      c 網膜対応      d AC/A 比      e 回旋斜視角

32 15 歳の女子。右眼の眼位異常を訴えて来院した。視力は右 0.05(0.15 × -10.00 D)、左 0.06(1.5 × -4.00 D)。眼位写真と両眼の眼底写真を別図 32A, 32B に示す。

正しいのはどれか。

- a 偽内斜視である。      b 不同視弱視である。      c 右眼に軟性白斑がある。  
d 右眼に網膜動脈閉塞がある。      e 右眼に視神経乳頭低形成がある。

33 5歳の女児。目付きが悪いことに母親が気付き来院した。眼位写真を別図33に示す。

正しいのはどれか。

- a A型外斜視である。
- b 顎引き頭位を好む。
- c 同側性複視がある。
- d 両眼の下斜筋強化術の適応である。
- e 治療は両眼の外直筋を後転する際に上方へ移動する。

34 5歳の男児。2週前から顔を回して物を見るに母親が気付き来院した。顔をまっすぐにすると物が二つに見えるという。眼位写真を別図34に示す。

原因として頻度が高いのはどれか。2つ選べ。

- a 炎症
- b 外傷
- c 腫瘍
- d 特発性
- e 血管障害

35 8歳の女児。生後半年頃から左の眼瞼下垂と視線が合わないことに家族が気付いていた。最近、本人が気になると訴えたため来院した。右眼の固視時と左眼の固視時の眼位写真を別図35に示す。

治療で正しいのはどれか。

- a 抗コリンエステラーゼ薬内服
- b 斜視手術
- c 上眼瞼挙筋短縮術
- d 斜視と上眼瞼挙筋短縮の同時手術
- e 前頭筋吊り上げ術

36 12歳の男児。通学中にめまいがして自転車から転倒して気を失った。受傷後は左眼瞼が腫れ、引いた後に左眼の霧視に気付き来院した。視力は右1.5(矯正不能)、左0.4(0.5×-0.50D)。左眼に相対的瞳孔求心路障害(RAPD)を認める。両眼の眼底写真とHumphrey視野の測定結果を別図36A、36Bに示す。

考えられる疾患はどれか。

- a 外傷性散瞳
- b 後頭葉脳挫傷
- c 外傷性視神経症
- d 非器質性視覚障害
- e 外傷性Horner症候群

37 45歳の女性。4日前から徐々に増大する複視を自覚して来院した。視力は両眼ともに1.0(矯正不能)。正面視、右方視、左方視および輻辏時の眼位写真を別図37に示す。

障害部位はどれか。

- a 前頭眼野～傍正中橋網様体(PPRF)
- b 傍正中橋網様体(PPRF)～外転神経核
- c 前庭神経核～外転神経核
- d 外転神経核～動眼神経核
- e 動眼神経核～内直筋

38 13歳の女子。夕方になると瞼が下がってくることを主訴に来院した。重症筋無力症を疑い、エドロホニウム塩化物静注試験(テンシロンテスト)を行った。注射前の写真を別図38Aに示す。

別図38Bは注射後、どのくらいの時間が経過したときのものか。

- a 1分
- b 10分
- c 30分
- d 1時間
- e 2時間

39 45歳の男性。健診で乳頭陥凹拡大を指摘されて来院した。右眼眼底写真を別図39に示す。

視神經乳頭所見で正しいのはどれか。

- a 正常範囲である。
- b 4時の位置に網膜神経線維層欠損がある。
- c 7時の位置にリムノッチングがある。
- d 9時の位置に傍乳頭脈絡網膜萎縮がある。
- e 11時の位置に乳頭出血がある。

40 緑内障による視野検査の結果を別図40に示す。

視力が低下する可能性が高いのはどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

41 70 歳の男性。健診で右眼眼圧が高いことを指摘されて来院した。眼圧は右 26 mmHg。前眼部写真を別図 41 に示す。

誤っているのはどれか。

- |                         |                        |
|-------------------------|------------------------|
| a Zinn 小帯が脆弱なことが多い。     | b 周辺虹彩前癒着を来しやすい。       |
| c 隅角の色素沈着が多いことが多い。      | d 白内障手術後に高眼圧を呈することが多い。 |
| e レーザー線維柱帶形成術が有効なことが多い。 |                        |

42 49 歳の男性。運転中にガードレールに衝突して来院した。視力は右 0.2(矯正不能), 左 1.2(矯正不能)。眼圧は右 13 mmHg, 左 15 mmHg。右眼に軽度の硝子体出血を認める。HbA1c 5.7%, 血圧は 140/85 mmHg。右眼眼底写真を別図 42 に示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察    b 硝子体手術    c 網膜光凝固    d 血圧下降薬投与    e 副腎皮質ステロイド内服

43 17 歳の男子。左眼にバスケットボールが当たり視力低下を自覚したため来院した。前房出血のため数日間は眼内の観察が不可能であったが、受傷後 7 日目に前房出血が消失した。その時の左眼前眼部写真を別図 43 に示す。

正しいのはどれか。2 つ選べ。

- a 歪視    b 近視化    c 低眼圧    d 調節障害    e 対光反射消失

44 63 歳の男性。12 年前に LASIK を受けて経過は良好であったが、右眼を打撲後、視力が低下し、受傷 7 日後に近医から紹介されて来院した。右眼前眼部写真と前眼部 OCT 像を別図 44A, 44B に示す。

視力低下の原因はどれか。

- |             |             |          |
|-------------|-------------|----------|
| a 角膜内異物     | b ぶどう膜炎     | c 細菌性角膜炎 |
| d 角膜上皮の層間迷入 | e びまん性層間角膜炎 |          |

45 66 歳の男性。この 1 年で左眼の近視が急速に進行したため来院した。視力は右 0.2(1.0 × -2.00 D), 左 0.04 (0.6 × -5.00 D ⊂ cyl -2.25 D Ax 110°)。徹照は良好で、眼底の透見も良好である。左眼前眼部写真と角膜形状解析および波面収差解析の結果を別図 45A, 45B に示す。

適切な治療法はどれか。

- |             |                 |          |
|-------------|-----------------|----------|
| a LASIK     | b 眼鏡処方          | c 水晶体再建術 |
| d 有水晶体眼内レンズ | e ハードコンタクトレンズ処方 |          |

46 68 歳の女性。左眼顆粒状角膜ジストロフィに対して、治療的レーザー角膜切除術を行った。手術 2 週後に別図 46A, 46B の所見がみられたため来院した。

診断で正しいのはどれか。

- |            |              |           |
|------------|--------------|-----------|
| a 細菌性角膜炎   | b 真菌性角膜炎     | c 薬剤毒性角膜症 |
| d ヘルペス性角膜炎 | e 再発性角膜上皮びらん |           |

47 76 歳の女性。近医で白内障手術中に合併症が発生し、術後 1 週で紹介されて来院した。視力は光覚弁。眼圧は 18 mmHg。術前視力は 0.3(矯正不能)。他眼は緑内障で失明している。前眼部写真と超音波 B モード像を別図 47A, 47B に示す。

治療法はどれか。

- |                        |                    |
|------------------------|--------------------|
| a 経過観察                 | b 前房洗浄             |
| c 抗 VEGF 薬硝子体内注射       | d 硝子体手術による網膜下出血の除去 |
| e 強膜切開による出血排出と硝子体手術の併用 |                    |

48 50歳の男性。右眼の網膜剥離に対し、水晶体を温存して硝子体手術と液ガス置換を施行した。翌日の右眼前眼部写真を別図48に示す。右眼に光覚弁があることは確認している。眼圧は右18mmHg。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察      b ガスの追加      c 前房形成術      d 水晶体再建術      e 抗菌薬の硝子体内注射

49 50歳の男性。2週前から右眼の変視が増悪し、視力も低下してきたため来院した。視力は右0.02(0.4×-8.00D  
∞ cyl-1.75D Ax 180°), 左0.06(1.0×-9.00D ∞ cyl-1.75D Ax 160°)。右眼眼底写真とOCT像を別図49に示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察      b 硝子体手術      c 強膜バックリング術  
d 抗VEGF薬硝子体内注射      e 副腎皮質ステロイドテノン囊下注射

50 70歳の女性。若い時から強度近視であったが、数年前から左眼の視力が低下し、変視が増悪したため来院した。視力は右0.04(1.0×-10.00D), 左0.02(0.3×-14.00D)。左眼眼底写真とOCT像を別図50A, 50Bに示す。

適切な治療はどれか。

- a 硝子体手術      b 光線力学療法      c 硝子体内ガス注入  
d 抗VEGF薬硝子体内注射      e 副腎皮質ステロイドテノン囊下注射